

欧風異世界王国再建物語



黒王国物語

朝倉あつき

幻想みっくす文庫



欧風異世界王国再建物語

黒王国物語

＊目次＊

第 0 1 章

姫の逃亡劇

6 P

第 0 2 章

暗躍する闇と影

P

第〇〇章 姫の逃亡劇

(一)

「お父様、一体、話とは？」

シュヴァルツ王国城三階。エレンは父親に呼び出されていた。何でも大事な話があるという。側には護衛騎士として仕えているフェイがいる。

「エレン姫や、我が王国は滅びる。我々は北の王国ノールオリゾン国の領地になることを呑んだ」

「それは、長年の戦争に我が国が負けたという事でしょうか？」

「ああ」

エレンの父は無念のため息を吐いた。所謂、シュヴァルツ王国は亡国になったという。その事に、エレンは涙を堪える事が出来なかった。

「お前は近郊の村、リーファイ村へ逃げるのだ」

「そんな、お父様、私はシュヴァルツ王国の姫として生きたいです」

「エレン姫、お前は生き延びて欲しい。それが、せめてもの、父の願いだ」

そう言い、エレンの父は視線で側にいた騎士——フェイに合図を送った。

「エレン姫様、さあ、行きましょう」

「フーく……、フェイ・ローレンス、私は、シュヴァルツ王国の姫として——」

「エレン姫様、我々は再起の為逃げるのです。王様の志を忘れないように……」

こうして、エレン姫は騎士・フェイと沢山のシュヴァルツ王国の民と一緒に近郊の村・リーファイ村へ逃げ延びた。

シュヴァルツ王国の再起を臨んだ、姫の戦いは始まったばかりだ。

「フーくん、私忘れないよ。戦争で失った物を、取り戻すために」

「エレン、私は……、俺は、お前共にある。その事を忘れるな」

「レオン、この国はどうやら負けたみたいだ」

沈黙はラルフの一言で破られた。レオンはきょとんと目を見開き、驚いた表情でラルフを見つめる。

「マジかよ、それ。俺らシュヴァルツ王国は強国だったじゃねえか。それでも、最先端技術を持つノールオリジン国には負けるのかよ？」

シュヴァルツ王国は長年、騎士の国で名が高く有名だった。そのシュヴァルツ王国がノールオリジン国に降伏したという。

この国一番の鍛冶屋の息子であるレオンは、呑気に武器を打っているが、そんなことをしている場合ではない。この国は滅びるのだ。

「その件に関してだが、ある噂を聞いた。替え玉のロボット、あれをどうやらアレックが準備しているようだ」

「ぶはっ、アレックが？ ああ馬鹿が？」

と、笑い話にしたものの、レオンは何か腑に落ちない点がある。この国にロボットという高度な技術を持った技師がいるなんて——確か、あれはノールオリジン国の技術だったはず。

「二人とも、聞こえてるよ。大声で喋りすぎだよ」

そこに噂の人・アレックがやって来る。ラルフとレオンの二人は言葉を濁し、その場をやり過ごした。

「ねえ、ニコラ君？ やっぱりさ、幾らロボットと言ったって、情が移るもんだよね？」

「アレック、良いのか？」

「セレナちゃん、彼女を救うよ」

アレックとニコラは動き出す。反逆の歯車は回り始める。

(三)

「この歌を聴けるも最後か……。」

宿屋の片隅にあるステージで、歌姫・アリスは歌の最後の一節を奏でた。彼女は最後の歌を歌い終わると悲しく笑う。

シュヴァルツ王国は敵国ノールオリゾン国に負けた。近いうち、ノールオリゾン国に領地は飲まれるだろう。

「セシルさん、最後の歌、聴いて下さりありがとうございました」

「いや、戦場から帰ってきて、最初にお前に会いたかったから、その……」

「私に会いたかった？」

「ああ。しかし、その大好きな歌声も、もう聴けなくなるとはな……」

そう言い、セシルは隠し持っていた花束をアリスに渡した。赤く白いシュヴァルツ王国産の花だった。その花言葉の意味——それは、ずっと側にいるという意味だ。

「先ほど、王様が国民をリーフィ村に逃がす事を決めたようだ」

「セシルさん、貴方も行くのですか？」

「この国を最後まで守りたいが、不可能だろう。既に、姫は逃げたと言っている。だから、どうかお前も、私と一緒に逃げ、そこで一緒に暮らそう」

「私は構いません。でも、ユウ様が……」

ユウ——彼は天使教の神子だ。ユウという神子が歌姫・アリスを好いている事は噂になっていて、アリス自身も知っている。神の子であるのに、ユウもまた、一人の男である。

「ユウ様が、逃げられるというのなら、私も——」

天使教はシュヴァルツ王国の国教で、アリス自身熱心な信者だった。

「知っているか。シュヴァルツ王国民の逃亡先のリーフィ村は、あの有名な元司祭であるセラビムがいるという。その話をすれば、ユウ様もきつとリーフィ村に行く決心をするだろう」

「明日、ユウ様に会う予定なので、話してみますね」

アリスがそう決心したその頃——天使教の教会では、慈悲活動が行われていた。負傷した兵を、神子が看病しているという。

「この人達を見ると、なんだか、あたし達がのうのうと生きているのが罪に感じるわね」

一人の黒神子モニカは告げた。

「モニカの馬鹿！ あたし達は、天使教の神にずっと祈ってたのよ。罪に感じる事はないわ！」

もう一人の黒神子・リリアンがそう告げる。とは言ったものの、リリアンも負傷した兵を見て心苦しくなったのは言うまでも無い。

「でも、シュヴァルツ王国は滅ぶし、天使教も滅ぶんだろうね」

白神子のメルルが肩を落とし負傷兵の看病に当たる。

「ねえ、ユウ。僕達も、シュヴァルツ王女と一緒に逃げるんだろうか？」

「そうですね。王女・エレン様は、我が天使教を崇拜していたと言いますし……、恐らく俺達と一緒にリーフィ村に行くことになるでしょう。ただ、俺には——」

そう言い、白神子・ユウは口を濁した。

神子でありながら、一人の女性を愛しているからだ。だが、その女性には婚約者がいる。報われぬ恋なのは分かってきっていた。だが、どうしても、彼女を忘れられなかった。

「あー、ユウ！ 噂の人が来たわよ。歌姫・アリス、いらっしやい！」

「ユウ様、お久しぶりです」

現れたのは、この国一番の歌声を持つ歌姫・アリスだった。現れた途端、ユウは顔を真っ赤にした。初々しい表情に、いつもからかっている黒神子・モニカは微笑する。

「アリス、貴方はリーフィ村に逃げるの？」

「ええ、そのつもりです。騎士団長・セシルと、共に——」

「ひゅーひゅー、貴方、確か、騎士団長・セシルと恋仲だったわよねえ」

恋仲、という言葉に、ユウはずきんと心が痛む。ああ、どうせ、自分は、崇拜する神だけ愛すれば良かったのに。もしかすると、この邪な心こそが、シュヴァルツ王国を戦争に負かせたのかもしれない。

「僕達神子も、負傷兵の看病が終わったら逃げるつもりなんだ。ねえ、ユウ？」

「え、あ、はい。その予定です。アリスさん。アリスさんもリーフィ村に逃げられても、天使教を信仰して下さるんですよね？」

「勿論です、ユウ様」

自分への信仰がせめてもの救いだ。それだけで良い。それだけで良いのだ。

こうして、騎士団長・セシルと共に、歌姫・アリスはリーフィ村へ逃げ延びたのだった。それを追うように、白神子・ユウもまた共にリーフィ村へ逃げたのだ。

生き残ったシュヴァルツ王国の民は迫害を受けるだろう。

それを思うと、逃げたことはその者にとっては裏切りかもしれない。

だが再起を願う姫・エレンを信じ、逃げ延びた者達は今日を生きていく。

(四)

黒い鳥がさえずり、白い鳥が奇声を放つ。

「イオンさん、ちょっとええ？」

シュヴァルツ三大貴族グローヴァー家に仕えるイオンに声をかけたのは、ツツジの里の少女――七瀬だった。

イオンは首を傾げ、七瀬から話を聞く。イオンは真剣に聞いていたが、とある単語が七瀬の口から露わになると、顔を強張らせる。

「王国復興の為や。イオンさん、一役買ってくれん？ あんたの協力が必要や、グローヴァー家領主を暗殺するには」

「七瀬さん、タダでは出来ませんよ。タダでは」

「あんたも、現金な奴やなあ。まあ、ええ。金ならぎょうさんあるで、これでどうや？」
そう言い七瀬は小さな袋をイオンに手渡した。

「これだけのお金の出所が知りたいですね。まあ、良いでしょう」

「イオンさん、おおきに」

これで、契約は結ばれた。あとは、親ノールオリゾン国側の領主を殺せば、親ノールオリゾン側も黙ってられないだろう。

「ダニエル様、あんたも悪い奴やなあ。人殺しするんやもん、それなりの対価払わんとなあ」

「世の中、綺麗事じゃやってけない。僕には、シュヴァルツ王国復興を果たさないとイケないんだ」

そろそろ、グローヴァー家第一子息とソレイユ第一令嬢の婚約は行われる。グローヴァー家領主の命のタイムリミットは来るだろう。

上手く、上手く行けばいい。シュヴァルツ王国復興の道筋は、始まったばかりだ。

灯火がゆらりと灯る。

「以下の通り、未来は、再び戦火に見舞われるんだな」

「それは本当なの、占い師エルマ？」

「情報屋ジュリアさん、ワタシの能力を疑っているんだな？」

小さな家の小さな部屋、その場所に占い師のエルマが住んでいるという。その噂を聞きつけた情報屋のジュリアは、情報集めの一環で、エルマの元に来ていた。

「いえ、そういう訳じゃ無いわ。お話ありがとう」

「最後に一つだけ、一つだけ言わせて欲しいんだな。黒き王国は再び復活するんだな」

「そうで、あって欲しいわね」

ジュリアはエルマに一礼すると立ち去る。エルマは暫く水晶を眺めていたが、何か首元に違和感を覚えた。

「間者とは、ノールオリゾン国も本気なんだな……でもまさか、ツツジの里が繋がっていたとは。

香月真理奈殿——」

「ご名答。貴方にはノールオリゾン国に来て頂きます、占い師エルマさん」

「何をしたいんだな。ワタシの言葉は偽る事は出来ないんだな」

「そうですか。貴方がシュヴァルツ王国の元帥——ウィル・リーヴィと繋がっている事は調査済み。この事を知れば貴方の命も在りませんよ？」

「ツツジの里も、訳が分からないんだな……どうすればいいんだな？ ノールオリゾン国が繁栄すると云った方が良いんだな？ 残念ながら、それはあり得ないんだな」

ため息を吐き、エルマは真理奈を見据える。その視線は軽蔑を意味していた。

「貴方方には、言うことは無いんだな」

「姫の居場所を教えて欲しいんです」

「ワタシは知らないんだな」

「白を切るつもりですか、致し方ないですね——カイ様、この者を」

「真理奈姫、了解。この占い師を連れてけば良いんだな」

ノールオリゾン国はツツジの長——玲と繋がっているというのは、本当だった。エルマはその意味を確かめると、黙って真理奈とカイに従った。

「情報屋の事が気がかりだが、どうする？ 真理奈姫」

「たかが、情報屋ですよ。しかし……」

たかが情報屋だが、エルマの予言は効力がある。もし、情報屋が漏らせばノールオリゾン国の覇権が揺らぐだろう。

シュヴァルツ王国国王、姫の処刑の時間は刻一刻と近付いている。この地は既に、ノールオリゾン国の物だ。だからこそ、ツツジの里は生き残っていかなくてはならない。

「ところで、少し気がかりな事がある。香月七瀬——彼女が最近怪しい動きを見せているようだ」

「従姉妹とて、ツツジの里の掟に背けば命は在りません。カイ様、調査を」
「了解、真理奈姫——」

全て、全て報告しなくては。予言者でもある占い師エルマが、再びシュヴァルツ王国は復活する
と言うことを——兄・玲に。

ツツジの里は揺れている。どの国に付くべきか、否や。

リーフェ歴二〇四九年五月十六日。

ノールオリゾン国に滅ぼされたシュヴァルツ王国の王、姫の処刑が執り行われる。

檻の中に入れられた仮初めの姫——セレナはそつと天井を見た。

この檻の中はどうして無表情なのだろう。今の自分も恐らく、無表情なのだろう。

仮初めの姫、エレンの替わりとして、自分は壊される。

そんなことをすれば、本物の姫はただでさえ身を危ぶむというのに——何故、元帥はこのような指示をしたのだろう。

コッソ、コッソと、床を掠める音が聞こえる。恐らく、兵であろう。再び波乱の時は迫っている。

「セレナ、こつち来い。命令だア」

「セレナ……？ 貴方、誰？」

セレナはそつと男を見据えた。すると男は兜を外し、セレナに手をさしのべる。

「ニコラ……？」

ガチャリと鍵が外される。ニコラはニヤリと微笑を浮かべ、告げる。

「お前を助けに来た。お前を仮初めの姫になんかにはさせねエ。親の俺が言うんだア。ほら、来い！」

ニコラはセレナの手を握り、引つ張る。セレナは自ら、檻の外へ出ている感覚に触れる。

ああ、私は自由なんだ。これを、臨んでいた。鉄の塊だからと諦めていた自由を手に入れる。

「アレック、わりい、時間かかってしまったぜエ」

「遅い遅い、見張りの兵どんだけ倒したって思ってるの？」

外で青い長髪の男が剣を鞘に入れ、自慢げに笑って見せていた。

「私、自由？」

「そうだよ、セレナちゃん。君は自由だ——誰にも、君の自由を奪わせはしない」

「自由、嬉しい……」

セレナには他の機械人形とは違った所がある。それは心だ。彼女には感情や思いがある。それを施したのは技師・ニコラであり、そう考えたのはアレックだ。

「さあ、逃げるよ」

そう言い、セレナ達は王国を飛び出した。

この出来事がやがて、波乱を、大きな波乱を生むだろう。

世界は謳うだろう。眩くだろう。

一人の少女と仮初めの少女が、やがて運命を交錯し始めると——